

# 婦毛遺跡（第2次）発掘調査報告

2012（平成24）年3月

三重県埋蔵文化財センター



## 例　　言

- 1 本書は、三重県伊賀市大内字黒土に所在する婦毛遺跡第2次の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、平成22年度広域農道事業（伊賀2期地区）に伴う工事立会により、新たに遺跡の広がりが確認され、実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会  
調査担当　三重県埋蔵文化財センター（調査研究I課）  
平成22年度　主幹　伊藤裕偉　技師　相場さやか
- 4 調査にかかる諸費用は、三重県農水商工部が全額負担している。
- 5 発掘調査にあたっては、地元の花之木地区および伊賀農林商工環境事務所から多大な協力を受けた。
- 6 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 7 当報告書の作成業務は当センター調査研究I課が行った。報告文の作成・編集は伊藤が行った。

## 凡　　例

### <地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三重県共有デジタル地図（平成19年測図）、広域農道伊賀二期地区平面図（伊賀農林商工環境事務所）である。これらの地図は、世界測地系（測地成果2000）に対応している。
- 2 調査区の座標は、測地成果2000に対応した新座標第VI系で表記している。挿図の方針は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏7°00'（平成17年）である。

### <遺構類>

- 3 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
- 4 土層図の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
- 5 当報告書での遺構は、通番としている。
- 6 遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。
- 7 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

S A……柱列　S B……掘立柱建物　S E……井戸　S H……竪穴住居

- 8 遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している

### <遺物類>

- 9 当報告での遺物実測図類は、全て実物の1/4である。
- 10 当報告書での用語は、「つき」は「坏」、「わん」は「椀」に統一している。
- 11 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号………挿図掲載番号である。

実測番号………実測段階の登録番号である。

様・質………「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など………遺物の器種を示す。

グリット………調査時に設定したグリット名を記した。

遺構・層名………遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量(cm)………遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴………主な特徴を外面(外；)・内面(内；)で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土………小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調………その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度………その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項………遺物の特徴となる事項を記した。

### <写真図版>

- 12 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
- 13 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

# 本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	(1)
1 調査の契機と経過	
2 調査の経過と法的措置	
3 発掘調査と記録の方法	
4 整理作業とその方法	
II 婦毛遺跡をめぐる諸環境	(4)
1 地形的環境	
2 歴史的環境	
III 調査の成果～層位と遺構～	(6)
1 調査区の地形と基本層位	
2 第2次調査区の遺構	
IV 調査の成果～出土した遺物～	(11)
1 概要	
2 古墳時代後期の遺物	
3 中世（室町時代）の遺物	
V 調査のまとめと検討	(13)
1 婦毛遺跡の広がり	
2 古墳時代後期の集落遺構	
3 婦毛遺跡古墳時代集落と須恵器窯跡	
4 城山遺跡（城館跡）と中世集落	
5 総括	

## 挿図一覧

第1図 婦毛遺跡と調査区の関係	第7図 柱列S A25実測図
第2図 計画路線と調査区の位置	第8図 井戸S E23実測図
第3図 婦毛遺跡と周辺の遺跡	第9図 掘立柱建物S B24実測図
第4図 調査区周辺地形図	第10図 出土遺物実測図
第5図 第2次調査区遺構平面図	第11図 城山遺跡（館跡）と高芝中世集落範囲想定図
第6図 壇穴住居S H21・22実測図	

## 表一覧

第1表 婦毛遺跡（第2次）遺構一覧

第2表 出土遺物観察表

## 写真図版一覧

写真図版1 調査区全景	写真図版5 個別遺構(4)掘立柱建物・柱列
写真図版2 個別遺構(1)壇穴住居S H21	写真図版6 個別遺構(5)井戸・柱穴
写真図版3 個別遺構(2)壇穴住居S H22(1)	写真図版7 出土遺物
写真図版4 個別遺構(3)壇穴住居S H22(2)	

# I 調査の契機・経過と行政的諸手続

## 1 調査の契機と経過

### a 総説

ここで報告する婦毛遺跡（第2次調査）は、平成22年度広域農道伊賀2期地区整備事業に伴い、発掘調査（記録保存）を実施したものである。調査は工事立会の形式で実施した。最終調査面積は392m<sup>2</sup>である。

### b 事前協議の経過

婦毛遺跡がある伊賀市大野木地区を通る広域農道事業に関する文化財協議は、平成20年度にはじまる。伊賀農林商工環境事務所（以下、「伊賀農林」）から照会を受けた三重県埋蔵文化財センター（以下、「当センター」）は、事業地内の範囲確認調査等が必要な旨を連絡し、双方で情報を共有することとなった。しかし、この段階では用地未買収部分があり、具体的な範囲確認調査は実施されなかった。

続く平成21年度も同様であったが、当該年度末に実施した協議で、範囲確認調査対象範囲の用地買収が翌22年度はじめには決着の見通しであること、事業の推進が急がれること、などが提示された。それを受けた当センターは、22年度前半期に範囲確認調査等を実施することとした。

### c 範囲確認調査と本発掘調査

上記協議を経て、平成22年10月8日に事業地内の対応を実施した。工事立会という形態を取ったが、まずは全体に範囲確認のための調査坑を配置して対処した。その結果、市道花之木新居線寄りに設定した3箇所の調査坑で焼土層（後にカマド跡と判明）や遺物の出土が見られ、遺跡の存在が認識された。地形を主とした全体環境から、周知の埋蔵文化財包蔵地である婦毛遺跡が当地にまで広がっているものと認識された。

これを基に当センターと伊賀農林とで協議を行い、範囲確認に引き続き、工事立会調査の形式で発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、道路工事事業の受注者である丸山建設株式会社が現物供与の形で作業員を手配するとともに、現場全体の安

全管理等を行った。

## 2 調査の経過と法的措置

### a 発掘調査の経過

婦毛遺跡（第2次調査）の発掘調査（工事立会）は、平成22年10月8日から開始し、同月22日に終了した。作業員は1日あたり4名前後で、実働は9日間であった。

#### ・調査経過

- 10月8日 範囲確認のための調査坑を設置。婦毛遺跡の範囲拡大が明らかとなる。
- 10月12日 発掘用具の搬入。表土掘削開始。竪穴住居を2棟確認。
- 10月13日 遺構検出。連日の日照りで、遺構面（粘土層）が乾いて堅い。
- 10月14日 SH21から土器片多く出るもの、細片ばかり。SK23から良好な土師器甕出土。
- 10月15日 SH21から須恵器坏身出土。SK23の底は岩盤にあたる（井戸か）。
- 10月18日 全体の清掃。写真撮影。
- 10月19日 遺構実測開始。
- 10月21日 竪穴住居の貼床を除去。補足実測など。
- 10月22日 発掘用具の撤収。伊賀農林へ引き渡し。

### b 発掘調査の普及・公開

当該発掘調査にかかる普及・公開事業として、工事立会調査という形式であったため、現地説明会は開催できなかった。しかし、調査成果報告会として、平成23年4月16日に開催した「おもしろいもん出したんやわ@三重2010」にて、調査成果の概要報告と遺物展示を行った。

また、三重県埋蔵文化財センターHPで発掘調査情報を公表した。

他には、花之木公民館の取材を受け、「公民館だより はなのは」第139号に記事が掲載された。

### c 文化財保護法等にかかる諸通知

発掘調査にかかる文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行っている。

- ・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

(県教育長あて県知事通知)

平成22年10月5日付け、賀農環第837号

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（松阪警察署長あて県教育長通知）

平成23年2月22日付け、教委第12-4410号

### 3 発掘調査と記録の方法

#### a 堀削の方法

範囲確認調査では、表土（約20～30cm）の直下で黄色系粘土・赤褐色系砂を確認している。発掘調査ではそれを参考に、表土全体を重機掘削した。

当地は昭和54年度に県営圃場整備が実施されている。そのため、その段階の工事痕跡が随所に見られた。これらの工事痕跡についても、重機によって除去していった。

#### b 地区設定

調査区内は、グリッド設定して調査を進めた。グリッドは、国土座標（第VI系）の軸線とは無関係である。

調査区内のグリッドは4m四方とし、西→東方向にアルファベットを、北→南方向に数字を付与した。

#### c 遺構番号

昭和54年度に実施された婦毛遺跡第1次調査では、SK1からSD11までの11基の遺構が報告されている。今回の調査ではそれとの混乱を避けるため、遺構番号を21から付与した。

#### d 出土遺物の回収

出土遺物は、出土年月日と層位・遺構の区別を行い、小地区単位で取り上げている。それぞれの遺物には専用のラベルを現地で付与したうえで、洗浄などの作業を行う当センターへ搬送した。

#### e 遺構図面

遺構検出段階で、1/40の略測図を作成した。これは「遺構カード」として用いるものであり、遺構毎の出土遺物や埋土の状況を記録している。遺構カードはグリッド単位で作成している。

1/40の略測図をもとに、さらに1/100の遺構配置図を作成した。これは、調査区全体の遺構配置を早い時期に認識する必要があると考えるためである。

発掘調査終了後に、正確な全体図作成を作成した。調査区の平面図は、全体を1/20の手書き実測した。一部の遺構については1/10で手書き実測した。調査区の土層図は、個別遺構に関してのみ作成した。これは、圃場整備によって調査区全体が平坦になっており、遺跡全体を覆うのは現状の耕作土のみであったことによる。

#### f 遺構写真

遺構関連の写真は、調査区全景写真や重要な遺構は6×7版（ブローニー）で撮影し、調査の進捗状況などを中心とした細かな記録には35mm版を撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に作成している。また、デジタル画像も適宜撮影した。

### 4 整理作業とその方法

#### a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載遺物およびその参考資料（A遺物）と、未掲載遺物（B遺物）に区分した。A遺物とB遺物は、収蔵スペースの制約から別の収蔵庫でそれぞれ保管されている。

#### b 図版作成と遺物写真撮影

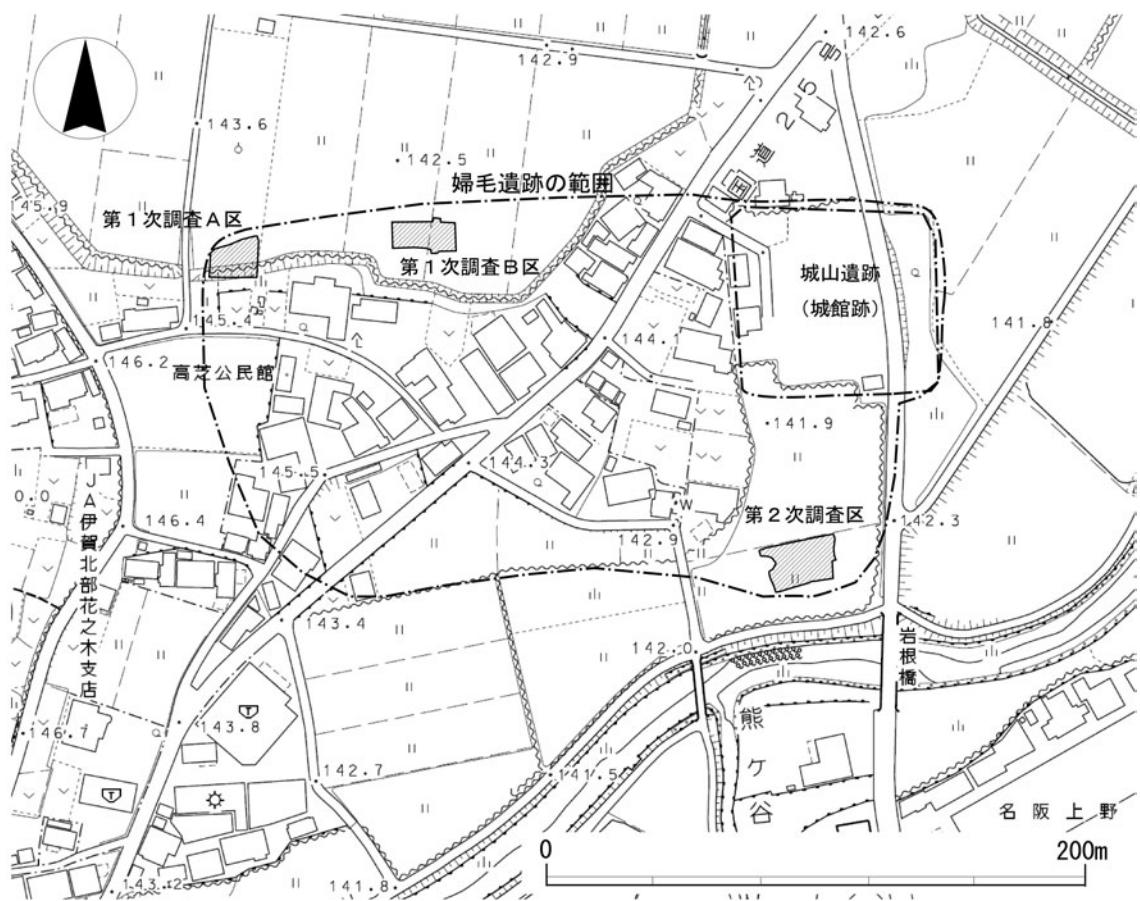
実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

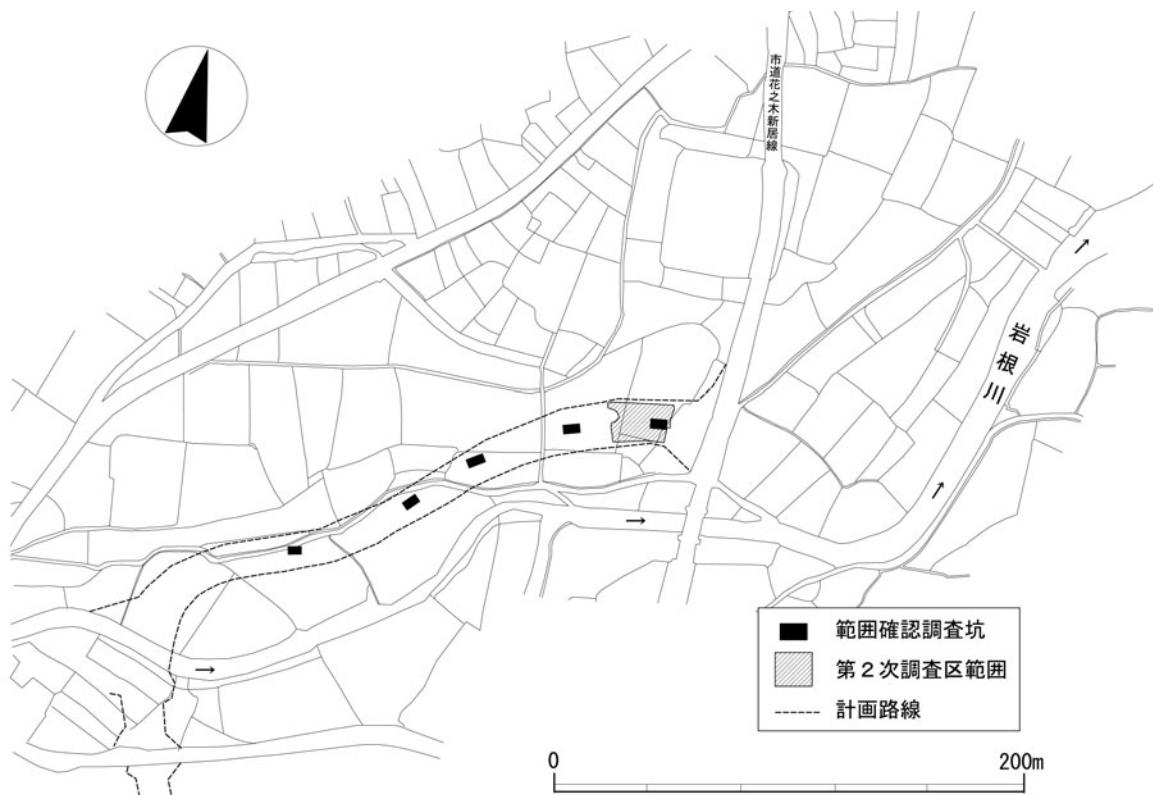
報告書掲載遺物は、報告書用の写真を6×9版（ブローニー）で撮影した。遺物写真の撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

#### c 記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。



第1図 婦毛遺跡と調査区の関係



第2図 計画路線と調査区の位置（地形図は圃場整備前）

## II 婦毛遺跡をめぐる諸環境

### 1 地形的環境

婦毛遺跡は、伊賀市大内字黒土ほかに所在する。当地は、伊賀盆地を北流する木津川の西岸部で、その支流、岩根川の北岸部である。

岩根川の北岸部には、高芝地区・高出地区・清水地区と延長約2kmにも及ぶ微高地が形成されている。微高地は、周囲よりも1~2mほど高くなっている。地形の特徴から、この微高地は岩根川が形成した河岸段丘と自然堤防が合わさった地形と見られる。婦毛遺跡は、この微高地の最も南西部、すなわち丘陵から微高地へと移行する位置にあたる。

### 2 歴史的環境

**古代以前** 婦毛遺跡を含めた周辺の特徴として、木津川沿いの低地部に形成された顕著な遺跡が存在すること、自然堤防上に様々な遺跡が見られること、古墳時代から奈良時代にかけての窯業（須恵器）生産地帯が隣接すること、散在した小規模な古墳群があること、などが挙げられる（第3図）。

木津川低地部では、北堀池遺跡が特筆できる。木津川河川改修に伴って発掘調査されたこの遺跡からは、古墳時代前期を中心とした良質の木製品のほか、当該期の集落と水田遺構が検出された。低地部における人々の活動を示す遺跡としては、弥生時代にさかのぼる出口遺跡や笠部遺跡などがあり、北堀池遺跡と同様に木津川沿線に点在している。これらの遺跡からも良質の木製品などが確認される可能性は極めて高いであろう。

自然堤防上の遺跡には、婦毛遺跡のほか、清水遺跡・清水北遺跡などがある。これらの遺跡は、岩根川北岸部に連続して見られる。低地部と微高地部の集落が持つ性質の差も今後の課題として興味深い。

木津川西岸部では、正言寺古墳群・雨田久保古墳群などの小規模な古墳群が散在している。これは、木津川を挟んで対岸にあたる久米山丘陵に、総数80基を超える古墳群が形成されているのとは好対照をなす。朝屋地区の大池古墳からは銀象嵌円頭太刀が

出土しており、木津川西岸部に有力首長層を輩出した集落の存在が想定できる。

これら以外では、河岸の微高地上に展開する古墳がある。清水北遺跡では6世紀後葉の横穴式石室墳（清水北古墳）が見つかっており、その西側からは神ノ木古墳が圃場整備に先立つ調査で確認された。これら平地の古墳群と丘陵部に形成された古墳群との間にいかなる歴史的背景の相違があるのか（それとも無いのか）、極めて興味深い課題である。

岩根川流域北部にあたる大野木・法花地区的西部丘陵内には、雨田久保窯跡・西光寺窯跡・小廻古窯跡などの古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器窯跡群がある。岩根川流域北部では散在的ながら須恵器窯跡群が展開していたのである。伊賀盆地の須恵器窯跡群は、岩根川流域北部の他に大きく2箇所ほどが認識されている。須恵器生産地としてこの地域を改めて評価し直す必要性があろう。

**中世以降** 中世の伊賀は、京都・奈良とも近いことから、畿内中枢部の文物が比較的ダイレクトに届く地域であった。また、婦毛遺跡のすぐ近くを通る国道25号は、奈良と伊賀を結ぶ幹線道路（伊賀街道）として機能していた。

婦毛遺跡近隣にある岩根の磨崖仏（県指定文化財）は、この幹線道沿いに造立されたものである。これは阿弥陀如来・釈迦如来・地蔵菩薩の三立像を半肉彫りで仕上げ、その横に五輪塔をレリーフしている。像様は極めて端麗であり、徳治第一（1306）年銘の存在も手伝って、歴史的にも美術史的にも注目されている。これ以外にも、西福寺（大野木）や西蓮寺（長田）などには室町時代を中心とした石塔・石仏群があり、当地の石造物文化の特徴が窺える。

また、大内・上之庄・笠部地区付近は、室町時代には奈良の興福寺（大乗院）領大内荘であった。大内荘は笠目荘とも呼ばれており、室町時代には大乗院へ粽を貢納していた（『大乗院寺社雜事記』）。

室町時代を中心とした中世後期から江戸時代にかけての時期には、方形の土壘と堀を巡らせた小規模方形城館が伊賀を特徴づけている。大野木地区近隣

でも、婦毛遺跡のなかにある城山遺跡のほか、神ノ木館跡、竹嶋氏館跡などが点在しており、小規模方形城館の密集地帯のひとつとなっている。このうち竹嶋氏館跡は伊賀市指定史跡となっている。

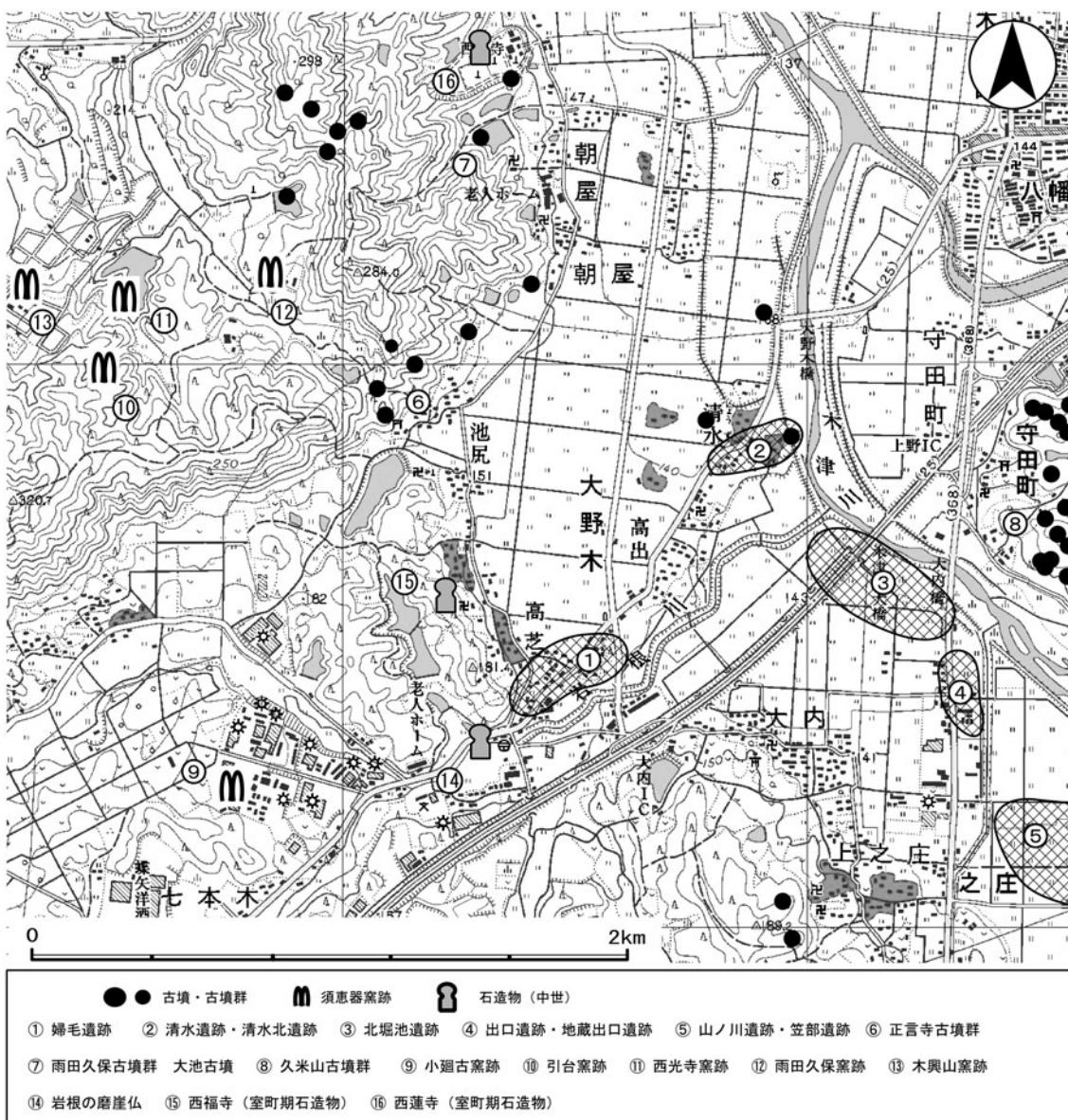
### 3 婦毛遺跡の発掘調査成果

婦毛遺跡の第1次発掘調査は、昭和54年に実施された（第1図）。この調査では、主に室町時代後期から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されている。なかには古墳時代後期と想定される須恵器大甕片もある。

第1次調査を見る限り、婦毛遺跡北部に中世以前の集落は広がっていないと考えられる。

#### ＜文献＞

- ・伊賀市編『上野市史考古編』（2005年）
- ・三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査報告』第1分冊・第2分冊（1981・1992年）
- ・三重県埋蔵文化財センター「伊賀市大野木 清水北遺跡・清水北古墳」（『伊賀の考古資料2』研究紀要16-4、2007年）
- ・三重県教育委員会「上野市大野木 婦毛遺跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1980年）
- ・竹内英昭「伊賀地域における古代窯業生産遺跡の調査」（『森永「エンゼルの森」開発地内埋蔵文化財分布調査報告－B工区－』上野市遺跡調査会、1994年）
- ・『大乘院寺社雑事記』（『史料大成』）



第3図 婦毛遺跡と周辺の遺跡（国土地理院1/25,000『島ヶ原』、『上野』、『月ヶ瀬』、『伊勢路』より）

### III 調査の成果～層位と遺構～

#### 1 調査区の地形と基本層位

##### a 調査区周辺の地形環境

婦毛遺跡は、南北に派生する低丘陵（標高約173m、平地部との比高は約30m）が岩根川北岸部に達する地点の東麓部にある。地形的に見れば、当遺跡は丘陵先端部の台地と、岩根川が形成した自然堤防の接地面で、なかでも自然堤防部分を中心に形成された遺跡と見られる。

遺跡の中心は現在の高芝集落で、標高は145mほどである。今回の第2次調査区は遺跡の南東部にある。遺跡の中心部から岩根川に向かっては緩やかな斜面で、調査区付近の標高は約141.5mである。

##### b 調査区の層位的特徴

第2次調査区は、昭和54年度に実施された圃場整備事業により、全体的に削平を受けていた。遺跡を覆う土層は、その段階で形成された耕作土層（表土、約25cm）のみである。そのため、調査区土層図の作成は行っていない。

遺構面の形成土は、淡黄灰色系粘土および褐色・赤褐色系細砂～粗砂層である。いずれも河成層で、粘土層は調査区北部を中心と見られ、砂層は調査区南部の岩根川寄りで見られた。

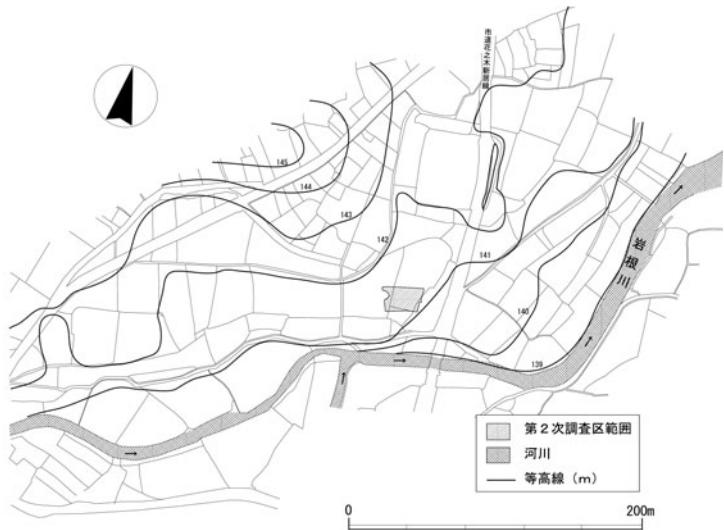
#### 2 第2次調査区の遺構

##### a 概要

第2次調査では、古墳時代後期を中心とした遺構を確認した（第5図）。確認したのは、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、柱列1条、井戸1基などがある。これ以外では、昭和54年度圃場整備前の耕地に見られた段も確認している（調査区南部）。

なお、中世（室町時代）の遺物は出土しているものの、その時期の遺構は確認できなかった。

以下、主立った遺構について述べる。個々の遺構については、後掲の遺構一覧表（第1表）も参照されたい。



第4図 調査区周辺地形図

##### b 主要遺構

**竪穴住居SH21**（第6図） 調査区南東端で検出した遺構である。方形のプランだが、壁面の南辺と東辺は圃場整備前の耕地造成によってすでに破壊されていた。また、北壁の一部はSH22と重複しており、重なり合いは明確にし得なかった。いずれの壁面も全体を覗えないが、主柱穴の配置と残存する壁面との関係から、東西約5.3m、南北約5.2mの規模と考えられる。

遺構の削平は著しく、検出時にはすでに床面ですら削平されていた状態であった。遺構の堀形が辛うじて確認でき、堀形掘削後に貼床をしている状況が確認された。堀形底面は凹凸が見られ、最も深いところで10cmほどの貼床土が確認できた。

建物を構成する柱穴（主柱穴）は4箇所見られ、壁面に合わせて方形に配置されている。主柱穴の堀形は約45cmの略方形で、4箇所とも中央に20cm弱の柱痕跡が認められた。

主柱穴配置前のピットや溝などの遺構も見られる。南西主柱穴の付近では、それと重複するピットが2基見られる。貼床の敷設後に掘削された遺構であり、かつ、南西主柱穴よりも古いものであるため、竪穴住居に伴う何らかの施設と考えられる。このピットのうち最も西寄りの遺構は、埋土内から骨片が



第5図 第2次調査区遺構平面図（1:200）

出土した。骨の種類は小片のため不明だが、何らかの祭祀行為である可能性も考えられる。南東主柱穴では、主柱穴掘削以前に設置された溝状遺構が重複している。

建物内の西壁寄りの床面上には、焼土が見られた。おそらく、カマドの痕跡と考えられる。

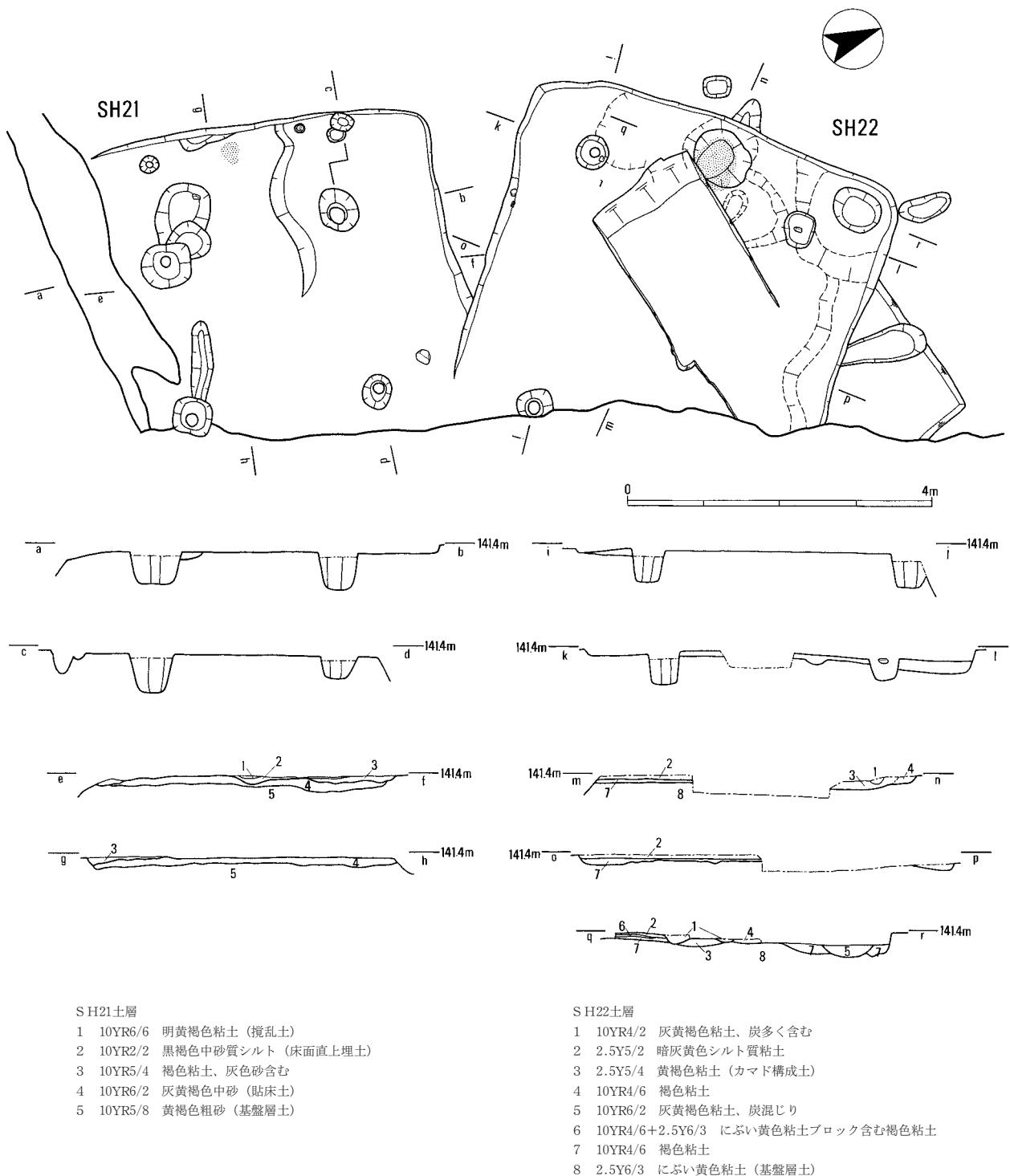
北西主柱穴の西側壁際には、直径20cm、床面からの深さ28cmほどの小ピットが見られる。掘削時の状況からは、竪穴住居に伴う遺構と考えられる。位置的に見て、貯蔵穴の一種と考えられる。

出土遺物は、西壁北寄りに完形の須恵器壊身が見られた。床面に接する位置であったため、この遺構の時期を直接示す遺物と考えられる。これ以外では、遺構埋土内から土師器（長胴甕を含む）片が少量出土した。

竪穴住居SH21は、床面から出土した須恵器から、7世紀前半頃に廃絶した遺構と考えられる。

**竪穴住居SH22（第6図）** 調査区の東端部で検出した遺構である。方形のプランだが、壁面の東辺を中心圍場整備前の耕地造成によってすでに破壊されていた。また、南壁の一部はSH21と重複している。遺構の規模は南北方向で約4.8m、東西方向は、主柱穴の配置と残存する壁面との関係から約5.5mと考えられる。

SH21と同様に遺構の削平は著しいが、SH22よりは深く掘られた遺構であったため、多少遺存状況は良好であった。遺構は、竪穴掘形の掘削後に貼床をしている状況が確認された。掘形底面は壁側ほど深く掘られ、東壁寄りでは16cmほどの貼床土が見られた。

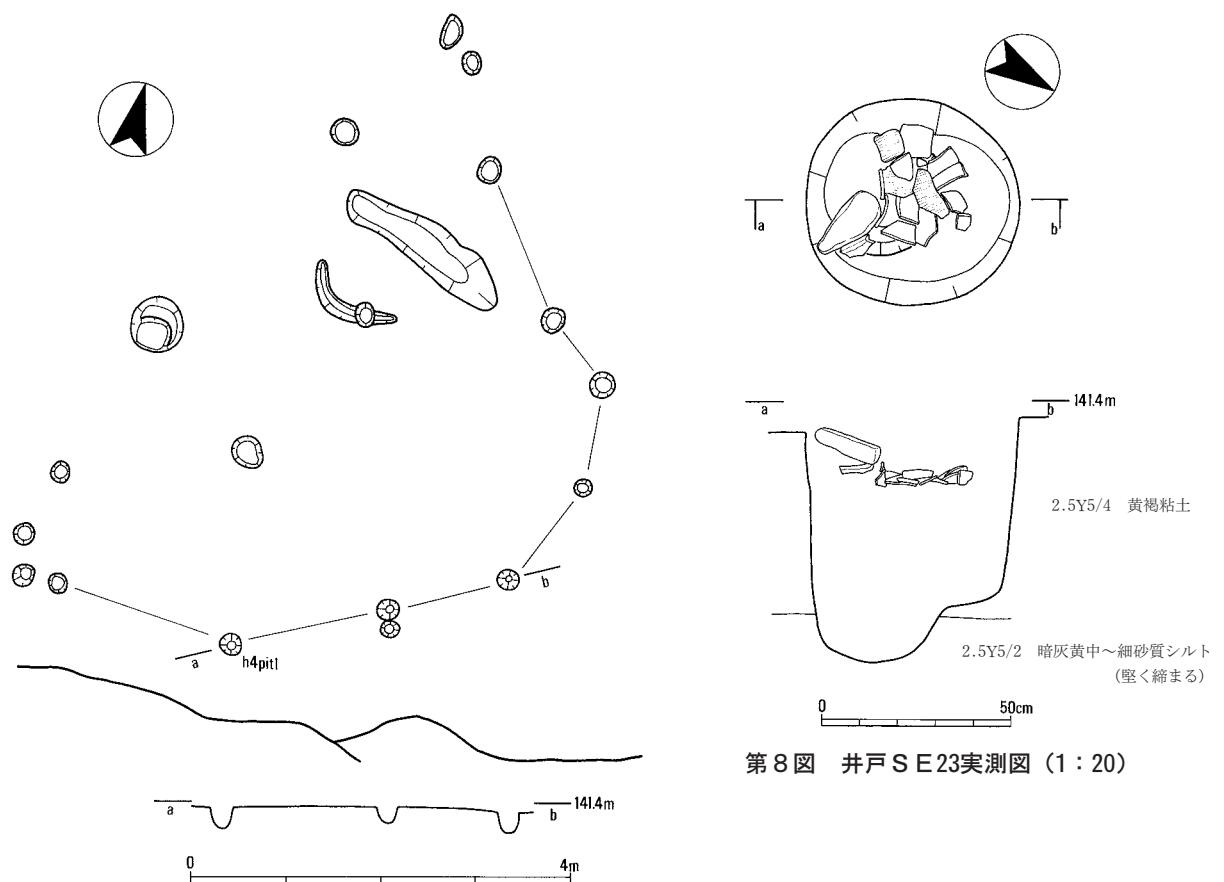


第6図 堅穴住居SH21・22実測図(1:80)

建物を構成する柱穴（主柱穴）は3箇所見られ、1箇所は後世の破壊により不明である。3基の柱穴は、SH21と同様、壁面に合わせて方形に配置されている。主柱穴の掘形は約45cmの略方形で、2箇所

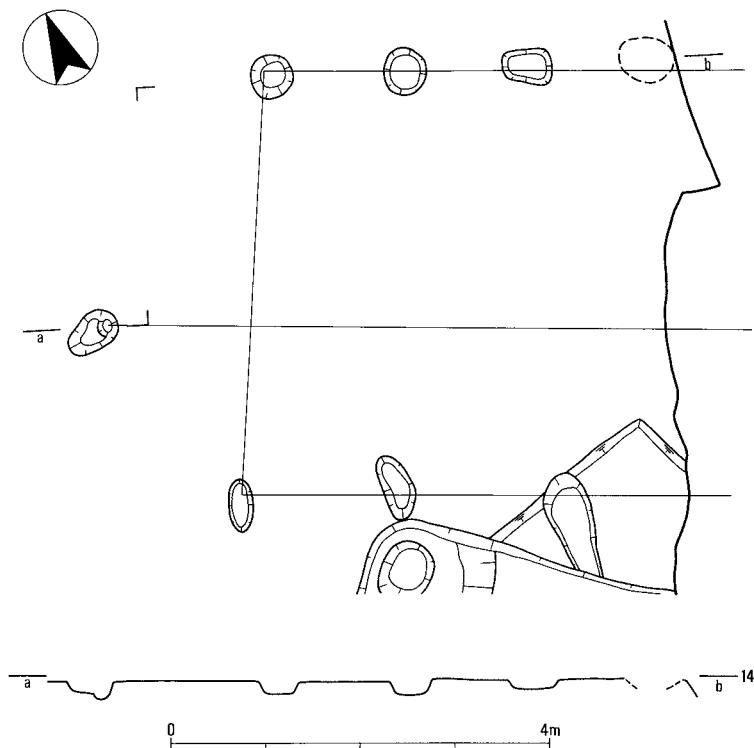
からは中央に20cm弱の柱痕跡が認められた。

建物内の北壁寄りにはカマドが見られる。袖部は削平で滅失していたが、カマド床面は遺存していた。また、カマド本体から建物外部へと延びる煙道も一



第7図 柱列S A 25実測図 (1:80)

第8図 井戸S E 23実測図 (1:20)



第9図 掘立柱建物S B 24実測図 (1:80)

部残っていた。カマドは、貼床の敷設後に一部掘り込み（あるいは貼床を窪ませて）、カマド用の粘土等を貼り付けることで造作されている。煙道は、床面から約5cm上がったところから穿たれている。カマドの構造土内からも土器片が出土しているため、当初の造成後に何度も補修を行っているものと考えられる。

カマドの右手、建物内部の北東隅には、直径70cm、床面からの深さ15cmの楕円形土坑が見られる。位置関係から見て、貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴は貼床敷設後に穿たれており、遺構そのものは貼床構成土内に収まっている。貯蔵穴内からは、目立った出土遺物は無かった。

出土遺物は、西壁北寄りに土師器壺と須恵器坏身片が見られた。この2点は床面に接する位置で出土したため、この遺構の時期を直接示す遺物と考えられる。これ以外では、カマド周辺を中心に土師器（長胴甕を含む）片が少量出土したが、全体に出土遺物は少ない。

豊穴住居SH22は、床面から出土した須恵器から、6世紀後半頃に廃絶した遺構と考えられる。

**掘立柱建物SB24（第9図）** 調査区の北東隅で検出した遺構である。遺構東部は大きく破壊されているため、全体の規模は不明だが、南北4.5m、東西6m以上の規模と考えられる。

東西方向を棟とする建物で、西棟柱が南北側柱列よりも大きく西へ飛び出すスタイルとなり、棟持建

物にあたると考えられる。北側柱列は4基のピット列で柱間は約1.4m、南側柱列は3基のピット列で柱間は1.7mである。側柱列の南北で、間数が異なっている。

遺構を構成するピットからの出土遺物は少なく、所属時期は明確にし難いが、南側柱列の一部と豊穴住居SH22の重複関係から、SH22よりも古い遺構（6世紀後半以前）と考えられる。

**柱列SA25（第7図）** 調査区中央のSE23周辺には、直径15cm程度の小ピット群がある。これらは明確なまとまりこそ無いものの、SE23の西側を開口部とし、それを取り巻くように円形にめぐっている。このため、柵状の施設がSE23の周囲をめぐっていたものと解釈した。

h4グリッドpit1から須恵器片が出土しており、6世紀後半から7世紀前半頃の遺構と考えられる。

**井戸SE23（第8図）** 調査区の中央やや南部で検出した遺構である。直径55cm・深さ65cmの遺構で、埋土上層部から土師器甕片がまとまって出土した。

この遺構を井戸と判断したのは、現況遺構面は20cm以上の削平が考えられること（これを踏まえると、深さは85cm以上となる）、遺構底面が硬質の砂層に達すること（水脈にあたっていたと考えられること）からである。

井戸SE23は、遺構埋土上層から出土した土器類から、6世紀後半頃に廃絶した遺構と考えられる。

第1表 婦毛遺跡（第2次）遺構一覧

遺構番号	調査時 遺構番号	性 格	時 期	グリッド	特徴・形状・計測数値など
SH21	SH21	豊穴住居	古墳後期	i3・4、j3・4	方形(5.3m×5.2m)、西壁にカマド、主柱穴4本、内部に骨片含む pitあり
SH22	SH22	豊穴住居	古墳後期	c・d3・4	方形(4.8m×5.5m)、西北壁にカマド(煙道あり)、貯蔵坑、主柱穴4本(残存3)、貼床
SE23	SK23	井戸	古墳後期	g3	平面円形(直径0.55m)、上層部に土器
SB24	k2pit1・2ほか	掘立柱建物	古墳後期?	j1~3、k1・2	棟持柱、梁間4.5m、桁行6m以上、SH22より古
SA25	h3pit1・h4pit1ほか	柱列	古墳後期	g4、h3・4	不規則な柱列、SE23の東側を円形にめぐる

## IV 調査の成果～出土した遺物～

### 1 概要

婦毛遺跡第2次調査で出土した遺物は、整理箱に2箱程度である。これは、圃場整備段階で遺構面がかなり深く削平されていたためと考えられる。内訳は土器類で、土師器・須恵器のほか、少量の磁器類を含む。所属時期は古墳時代後期（6世紀後半から7世紀前半）のものが大部分で、中世（室町時代）のものが1点のみある。ほとんどが遺構からの出土遺物で、遺構以外の遺物は、圃場整備段階に盛土をした部分（旧地形で低かった部分）からの出土に限られる。

実測可能な遺物を第10図に示した。出土遺物の詳細は遺物観察表（第2表）も参照されたい。

### 2 古墳時代後期の遺物

**豎穴住居S H21出土遺物（1～3）** 豊穴住居S H21からは、図示したもの以外では土師器長胴甕の体部片や少量の須恵器片がある。

1は須恵器环身。扁平な形態で、口縁部径は9cmと小さい。陶邑編年<sup>(1)</sup>のTK209～217型式に併行し、7世紀前半頃のものと考えられる。2は土師器のミニチュア土器か小形の丸底壺と考えられる。丸底壺だが、底は成形時の圧迫で小さな平底状となっている。3は土師器甕で、表面の剥離が著しい。

**豎穴住居S H22出土遺物（4～6）** 豊穴住居S H22からは、図示したもの以外では土師器長胴甕の体部片、須恵器甕片などがある。

4は須恵器环身。口縁部径は12.4cmで、1と比べればやや大きい。陶邑編年のTK43型式に併行し、6世紀後半頃のものと考えられる。5は土師器高環。剥離が著しく、調整は不明。下部で屈折する。6は

異形の小形壺。底は丸みを帯びた平底風で、直胴状の体部に短く開く口縁部が伴う。韓式系土器か、ないしはその影響を受けたものである可能性が考えられるが、遺存が悪いため、断言できない。

**井戸S E23出土遺物（7・8）** いずれも遺構の上層部から出土した。2点とも土師器甕で、やや小形の7と少し大形の8がある。いずれも丸底と考えられる。口縁部の形態から、6世紀後半頃のものと考えられる。

なお、8は破片の状態で出土し、全ての破片が接合したが、それは口縁部から底部にかけて約1/3のみの状態であった。このことから、おそらく意図的な破碎を受け、その一部を選択的に遺構内に納めたものと考えられる。

**柱列S A25出土遺物（9）** 9は調査区中央の円形柱列S A25を構成するピットのひとつ、h 4グリッドpit 1から出土した須恵器环身である。形態の特徴は前出の1に類似しており、7世紀前半頃のものと考えられる。

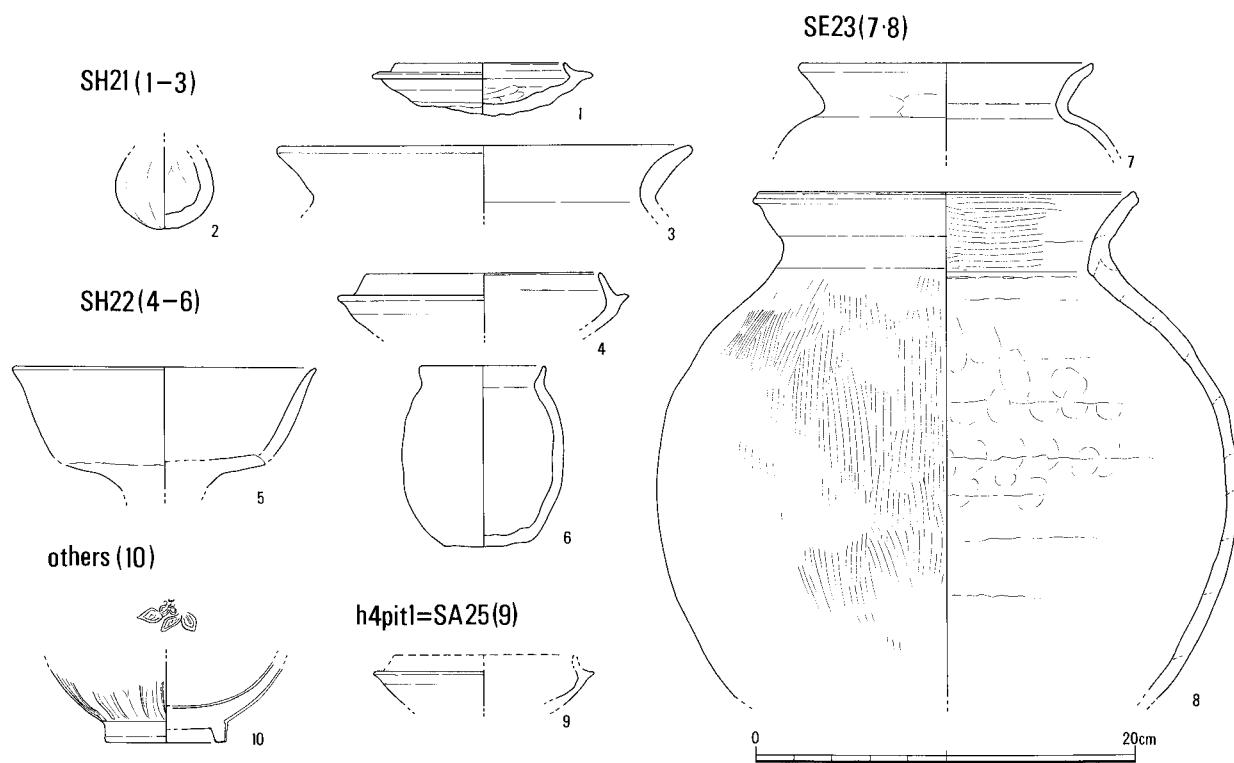
### 3 中世（室町時代）の遺物

**遺構外出土遺物（10）** 遺構に伴っていないが、中世（室町時代）のものが1点出土している。10は青磁碗。内面には草花文のスタンプが押されている。外面は蓮弁文である。小野正敏氏による分類<sup>(2)</sup>のⅠ期にあたり、15世紀中葉頃のものと考えられる。

#### ＜註＞

(1)田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1980年)

(2)小野正敏「出土陶磁より見た15・16世紀における画期の素描」(『MUSEUM』第416号、東京国立博物館、1985年)



第10図 出土遺物実測図 (1:4)

第2表 出土遺物観察表

番号	実測番号	様・質	器種等	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	1-1	須恵器	壺身	I 4	SH21西壁	(口)9.0 (高)2.8	外:回転ナデ→底部ヘラ切り 内:回転ナデ→見込みにナデ	密	灰白	ほぼ完存	外面に素地巻き上げ痕明瞭(下から見て反時計回り)
2	3-2	土師器	ミニチュア土器	J 4	SH21北東埋土	(体)5.2	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	密	橙	体部3/12	底はやや平底気味
3	3-4	土師器	甕	I 4	SH21北西埋土	(口)21.9	外:剥離 内:剥離	粗	灰白	口縁1/12	
4	1-2	須恵器	壺身	J 3	SH22西壁	(口)12.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	浅黄橙	口縁2/12	
5	1-3	土師器	高壺	J 3	SH22	(口)16.0	外:剥離 内:剥離	粗	浅黄橙	口縁1/12	2片を合成
6	3-1	土師器	小形壺	J 3	SH22西壁	(口)6.4 (高)9.6	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密	明赤褐	口縁1/12 底部12/12	底部は平底気味 剥離頗著
7	1-4	土師器	甕	G 3	SE 2 3	(口)15.4	外:剥離 内:剥離	粗	灰白	口縁1/12	
8	2-1	土師器	甕	G 3	SE 2 3	(口)20.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁3/12	
9	3-3	須恵器	壺身	H 4	p i t 1	(受部)11.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	青灰	受部1/12	
10	1-5	青磁	碗		調査区東端	(高台)6.4	外:鎬蓮弁文→施釉、高台ケズリ出し 内:スタンプ花文→施釉	密	釉;オリーブ灰	高台3/12	龍泉窯系

## V 調査のまとめと検討

### 1 婦毛遺跡の広がり

婦毛遺跡は、昭和54年度の圃場整備事業に伴い発見された遺跡である。しかし、今回の調査地付近は、この段階では遺跡の範囲として認識されていなかった。今回、農免農道整備事業が周知の埋蔵文化財包蔵地である当遺跡の隣接地を通るので、念のため工事立会を実施したところ、新たに遺跡の広がりが確認されることとなった。

今回の発掘調査では、古墳時代後期を中心とした集落遺跡が確認された。これまで婦毛遺跡は中世を中心とした遺跡と考えられていたので、今回の発掘調査が持つ意義は大きいといえる。この結果、第2次調査区よりも標高が高くて安定している現在の高芝集落方向に、当該期の集落が広がっているものと推測できる。

### 2 古墳時代後期の集落遺構

今回の第2次発掘調査区は、すでに圃場整備が済んでいる地点であり、削平が大きく及んでいた。そのため、遺構の残存は決してよくなかったが、それでも、堅穴住居2棟、掘立柱建物1棟のほか、井戸とその付帯施設と考えられるピット群などの遺構が検出された。出土遺物は少なかったが、おおよそ古墳時代後期の6世紀後半から7世紀前半にかけての集落跡だと考えられる。

堅穴住居は方形のプランで、4本の主柱穴を配置し、西辺の中央にカマドが設けられたものである。SH22は、カマドの右手に貯蔵穴がある。この形態は、伊勢・伊賀地域の古墳時代堅穴住居によく見られる形態である<sup>(1)</sup>。また、SH21にもカマドの右手に小ピットがある。SH21の小ピットは直径20cm程度のものなので、貯蔵穴とは断定できないが、位置関係から同種の遺構である可能性は考えられる。SH21の状況は、今後の発掘調査でカマド右手に見られる小ピットの存在にも注意を配る必要があることを示している。

2棟の堅穴住居は、6世紀後半→7世紀前半（SH

22→SH21）という時期差がある。周囲に他の堅穴住居跡が見られず（削平の可能性はあるが）、カマドの方向にも類似性が見られる。継続して建て替えられた関係にあると見られる。

井戸は堅穴住居の西側にやや離れて見られる。井戸の周囲にあるピットは、堅穴住居と共に通する埋土の特徴を示しており、両者はほぼ同時期と考えられる。ピット群は、堅穴住居の主柱穴のようなまとまりこそ無いが、全体として見れば円形に巡っている。おそらく、小規模な材木を用い、井戸を取り囲むような施設と考えられる。このような事例は三重県内ではこれまで見られないが、群馬県中筋遺跡・黒井峯遺跡などで確認されている平地式住居<sup>(2)</sup>のようなものと見て大過ないであろう。

### 3 婦毛遺跡古墳時代集落と須恵器窯跡

第Ⅱ章で見たように、婦毛遺跡の西方丘陵部には須恵器窯跡である小廻古窯跡がある。この窯跡のさらに北方丘陵部にもまとまった須恵器窯跡群があり、婦毛遺跡近隣は伊賀の一大須恵器生産地であったことがわかる。これを踏まえて婦毛遺跡の立地を見ると、この遺跡は岩根川北岸部の良好な低台地上にあり、河川水運を利用するには最適の場と見ることができる。窯跡群の認識が比較的難しいことを考え合わせれば、岩根川上流部には未知の窯跡群がさらに多くあることも充分想定できる。

以上のことから、婦毛遺跡は須恵器（窯業）生産とも何らかの関わりを持った集落と推測する。性格としては、生産に携わる人々（工人）の居住地、製品としての須恵器の集荷地などを想定することができよう。

### 4 城山遺跡（館跡）と中世集落

城山遺跡（館跡）は、婦毛遺跡の北東約30mにある。遺存する土壘と堀状窪地の痕跡からは、東西約30m・南北約28m（土壘の外側規模）の、いわゆる方形城館である。

婦毛遺跡調査区からは、中世に相当する時期の遺

構は全く検出されていない（削平された可能性は残る）。第2次調査区の場所は、岩根川を見下ろす南向きの良好な地である。その場所に中世集落が広がっていないということは、この時期の集落は高芝集落を中心とした場所にあたると考えられる。

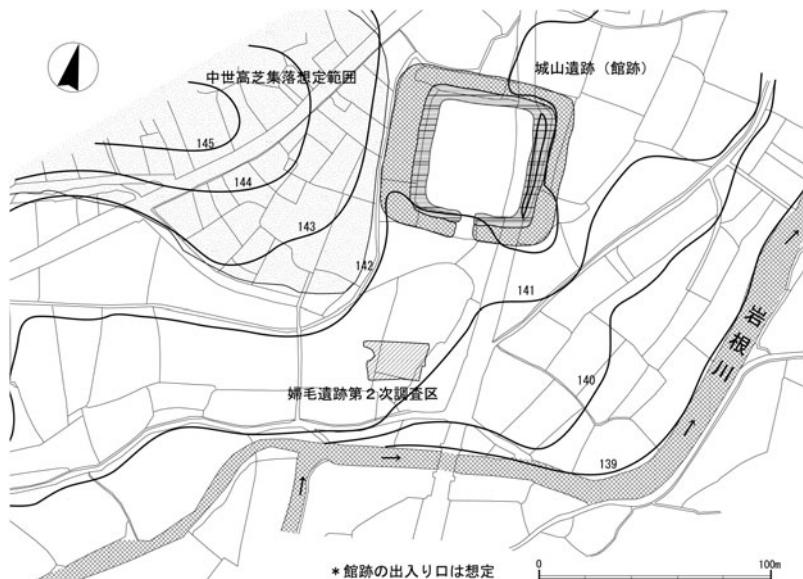
このように見ると、城山遺跡（館跡）は高芝集落の東端部に築造されたもので、集落からは一線を画して成立したと考えられる。そして、高芝集落から見れば標高の低い位置であり、決して良好な場ではないことも注意したい。

これらのことから、城山遺跡（館跡）の主については、高芝集落の中から生まれた者が否かを問わず、集落の中にこのような館を設けることができなかつたということができる。つまり、土壘と堀とに象徴される軍事性は、集落（村の中核）に食い込むことができず、そこからやや外れたところでのみ発揮できる程度であったと考えられる。

今回の調査対象地は、城山遺跡（館跡）部分にまでは及んでいないが、この館跡に関連すると見られる青磁碗が調査区東部から出土している。15世紀前半頃の良好な製品である。この土器から、城山遺跡（館跡）の所属時期の一端を考えてよいであろう。

## 5 総括

以上、婦毛遺跡の第2次発掘調査成果から、当遺跡の性格と展望を示した。古墳時代後期には当遺跡に集落があり、それは須恵器窯群との関係を想定し



第11図 城山遺跡（館跡）と中世高芝集落想定図

た。中世後期には城山遺跡（館跡）があり、当該調査区で中世の集落遺跡が確認できなかつたことから、城山遺跡（館跡）の性格に関しても一定の見解を見出すことができた。

婦毛遺跡のある大野木地区には、様々な文化財が多数見受けられる。それらを理解していくためにも埋蔵文化財のデータはかなり雄弁なのである。

### ＜註＞

(1)事例としては、雲出島貫遺跡（津市）・小谷赤坂遺跡（松阪市）などがある。三重県埋蔵文化財センター『鳴抜』Ⅲ（2001年）、同『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』（1996年）。

(2)石井克巳・梅沢重昭『黒井峯遺跡－日本のポンペイ－』（読売新聞社、1994年）

調査区  
全景



全景（東から）



全景（東から）

写真図版 2

竪穴住居  
S  
H  
21



全景（東から）



須恵器壊出土状況（北から）

竪穴住居 S  
H  
22  
(1)



全景（南から）



カマド、主柱穴、貯蔵穴（東から）

写真図版 4

竪穴住居  
S  
H  
22  
(2)



カマド（南から）



遺物出土状況（西壁寄り、東から）

掘立柱建物・柱列



掘立柱建物 S B 24 (西から)



柱列 S A 25 (南から)

写真図版 6

井戸  
・  
柱穴



井戸 S E23（北から）



竪穴住居 S H22北西主柱穴断ち割り（西から）

出土  
遺物



# 報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告 327

婦毛遺跡（第2次）発掘調査報告

2012（平成24）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社

